

新規就農者

1. 放牧の魅力とは

新規就農者やそれを目指して北海道に来る方々のほとんどが放牧風景に憧れを持ち、その実現に向けて酪農経営を選んでいる方が大半です。

ゆとりのある放牧酪農

(1) 経営

給餌、糞尿処理、自給飼料収穫などの作業時間や燃料等の資材費が削減できます。

(2) ふん尿処理

本来の飼い方に近い放牧で、ストレス軽減、家畜診療費を削減、産次数の向上が期待できます。

(3) 草・土

土-草-家畜の循環が成立し、土壌生物、有機物、保水力が高い健全な草地で、持続性の高い生産が行えます。

(4) 生態系保全・景観保全

草原に特有の植物、動物が保全されます。草地に牛がいる景観は人を和ませ、観光資源にもなります。

(5) 乳製品の安定供給

耕作が不向きな土地でも利用でき、輸入飼料への依存度を減らすことができます。

放牧酪農の魅力は、牛、草、土が本来もっている能力を生かして、人、牛、環境に負担の少ない乳生産を行うことです。労働時間とコストを削減しつつ、乳牛を健康で長く飼うことができます。放牧により植物密度の高くなった草地は炭素蓄積、土壌保全、雨水の貯留などの機能に優れます。豊かな土壌生物が草地の生産性を高めます。機械作業が困難な山間地でも、牛は草から良質な畜産物を生産します。もちろん、このような放牧の長所を引き出すには、適正な放牧をすることが重要です。過放牧では環境に悪い影響を与えます。放牧を上手に使いこなしましょう。

新規就農で放牧経営の紹介

1. 別海町 近津牧場

別海町の近津牧場は新規就農後 15 年ほどになる経営です。当初から放牧経営を目指して放牧技術の研鑽に努めてきました。地域では小規模ですがゆとりある家族経営を目標に低投入で資源循環型経営を実践しています。放牧は中牧区利用で採草地もすべて 1 番草と 2 番草収穫後に放牧利用としています。

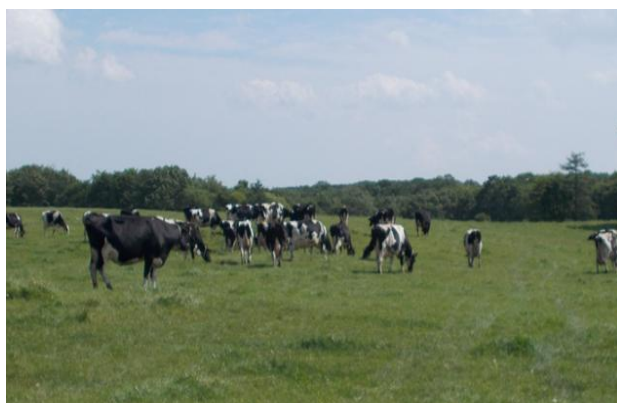
有機飼料生産の認証を取得しており、肥料はケイフンとホタテ貝殻肥料のみ投入しています。中牧区利用で放牧期の配合飼料給与はゼロでエネルギー飼料のビートパルプのみの給与です。こうした放牧利用で乳牛の平均産次は 4 産になって供用年数を長くしています。資源循環酪農のため、堆肥の活用には多くの時間をかけています。ふんにはぼかし肥料を添加し年 6 回の繰り返しで堆肥化し、保管後、秋に全量兼用地に散布しています。

近津牧場

項 目	2022年実績	摘 要	項 目	2022年実績	摘 要
労働力	1.8人	家族夫婦2人	放牧方式	中牧区	1牧区 1週間程度利用
飼養頭数	58頭		牧区数	10	兼用地 4
経産牛	40頭		1牧面積	3ha	兼用地6.5ha
育成牛	18頭		成牛1頭面積	-	
飼料面積	50.0ha	有機飼料生産	経産牛1頭乳量	6,500kg	
採草地	-		乳飼比	20%	
放牧地	24.0ha		所得率	-	
兼用地	26.0ha				

兼用地は 1 番草収穫後の 7 月以降に放牧利用します。

放牧場の牛群



広い牧道



中牧区編成圃場図



2. 中川町 丸藤牧場

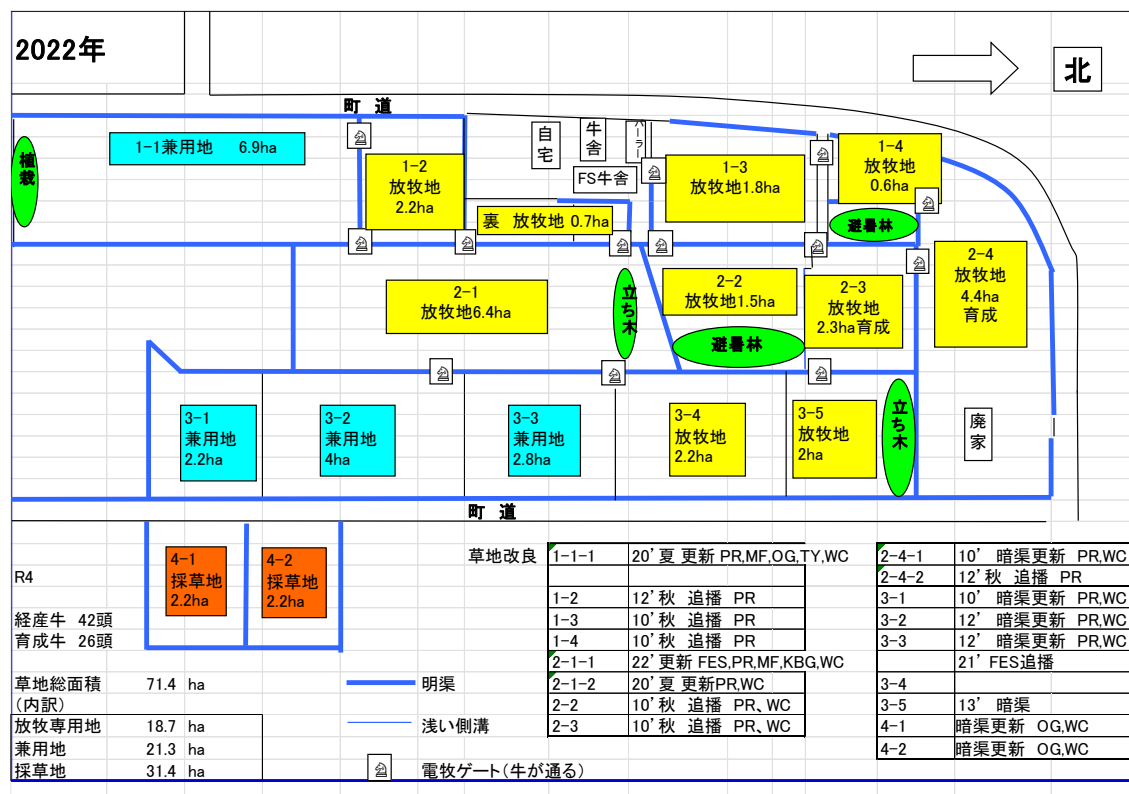
新規就農後 15 年になる牧場です。フリーストール方式による放牧利用経営です。土地条件は平坦地ですが、土質は粘土質と泥炭土であり、土壤条件は良くありません。暗渠の整備と牧草地の土壤改良など植生改善に努めた結果、良好な牧草地に改善され良質な牧草生産を実現しています。放牧は小牧区から中牧区編成で滞牧は 1 日から数日と柔軟な活用です。今後は有機飼料生産を目指しており、その移行に向けた取り組みを始めています。

丸藤牧場

項 目	2022年実績	摘 要	項 目	2022年実績	摘 要
労働力	1.5人	夫婦	放牧方式	小～中牧区	
飼養頭数	75頭		牧区数	14	兼用地3牧区
経産牛	43頭		1牧面積	0.7～4.4ha	
育成牛	32頭	育成牛専用牧区	成牛1頭面積	1.2ha	
飼料面積	71.4ha		経産牛1頭乳量	6,790kg	
採草地	31.4ha		乳飼比	12.2%	
放牧地	24.4ha		所得率	-	
兼用地	15.9ha				

兼用地は 1 番草収穫後の 7 月以降に放牧利用します。

圃場図

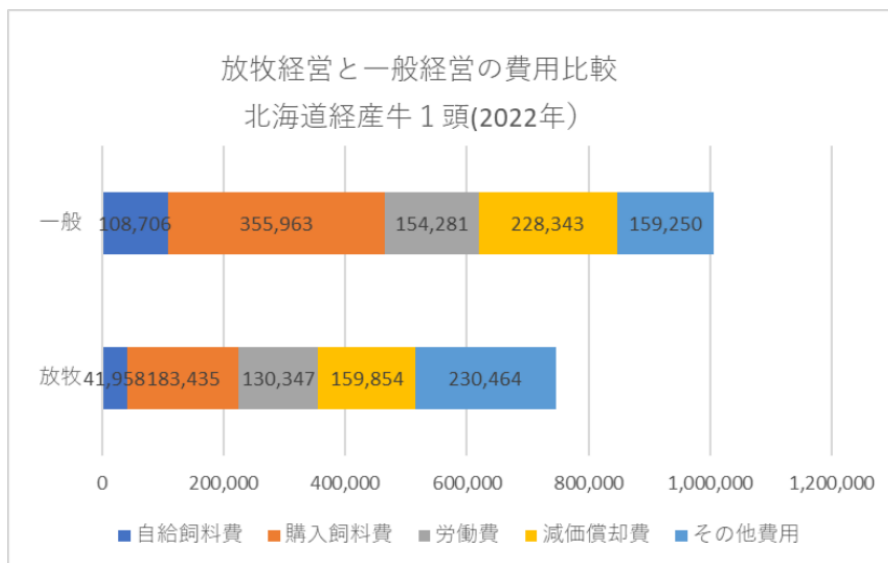


2. 放牧で経営が成り立つの？

(1) 放牧経営と一般経営の生産費用比較

放牧経営（放牧畜産実践牧場の代表的4戸平均）と一般経営（2023年12月北海道生産費調査実績）の生産費用を下記に比較しました。生産費用における放牧経営の優位性が明らかに認められます。2022年次の比較ですが当期は購入飼料費の高騰など生産費用が急上昇した年でした。多くの酪農経営（北海道で約8割とも推定）で収支が悪化して欠損経営が続発しました。しかし、約1割とみられる放牧経営と自給飼料重視の経営では経営収支は概ね良好に推移しています。

このことの実態が費用比較に示されています。従来はこれほどの費用格差ではなかったのですが2022年の購入飼料価格の高騰が購入飼料依存度の高い通年舎飼い経営の飼料費を大きく増大させて利益を急減させたと言えます。購入飼料費の依存度の低い自給飼料重視経営や放牧経営ではこの影響が少なく、生産費用の格差が一層広がったものです。



(2) 放牧経営の生産コスト低減の生産方式について

北海道中川町の新規就農者：丸藤牧場の紹介

道北中川町で新規就農して群管理方式による放牧経営を実践している丸藤牧場の年間生乳生産について一般経営（舎飼い主体）の乳牛検定成績から生産技術の内容について詳しく検討しました。FCM（脂肪率4%換算乳量）を算出して逆算方式で自給飼料由来の乳量を算出して比較しました。日本飼養標準に基づいたその算出方法は以下の通りです。経産牛1頭当たりの1日産乳量の変化を示しました。

自給飼料由来生産乳量＝FCM－購入飼料生産乳量

FCM＝（1.5×脂肪率÷100＋0.4）×乳量

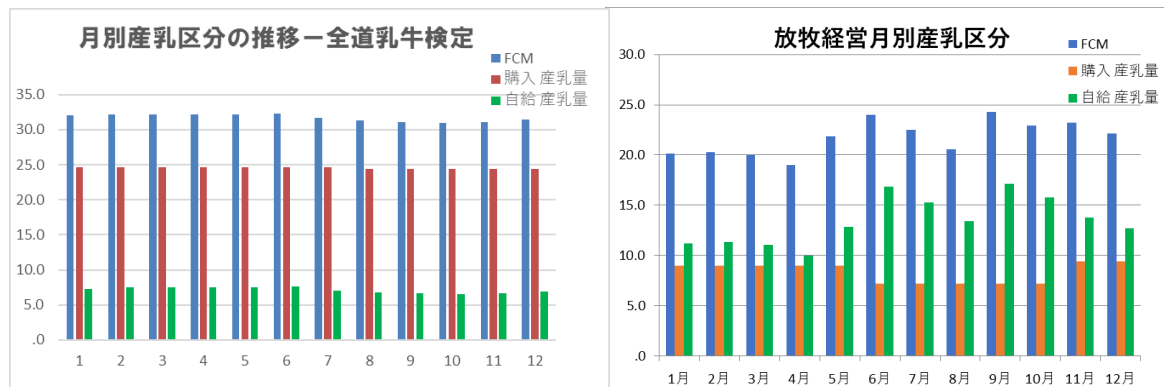
※脂肪率4.0%換算乳量

購入飼料生産乳量＝（購入飼料量×TDN率）÷0.33kg

0.33kgは脂肪率4%の牛乳を生産するために必要なTDN量

年間牛乳生産の特徴（一般経営との比較）は、一般経営では月ごとの変動は少なく、年間コンスタントに産乳されていますが放牧経営には季節性があります。放牧期（5～10月）と舎飼い期（11～4月）で牛乳生産量に差があります。これが放牧酪農の特徴です。また両者には産乳内容に大きな相違があり、自給飼料由来の産乳量に大きな差があります。すなわち、放牧経営では年間をととして自給飼料由来の産乳量が多く、特に放牧期にはこの産乳量がかかなり多いことが示されています。ここに放牧酪農の生産コスト低減の要因があります。自給飼料由来の乳量が多いということは飼料給与面における飼料自給率が高いことも示しています。この結果、生産費用の購入飼料費をかなり少なくできるのです。

また、牛乳の需要は夏季に多くなりますので放牧生産は牛乳の需給にも合致しているとも言えます。



(3) 放牧草の経済的有利性について

ここで放牧草の生産コストについて少し検討しておきます。通常乳牛に給与されている購入飼料と比較しました。

栄養バランス (TDN/CP) と TDN 1 kg 当たりの価格 (コスト) を比較しています。乳牛の栄養は大きく維持養分と産乳養分に区分されますが、これは TDN/CP 比 (栄養バランス) で表すことができます。日本飼養標準から維持養分の TDN/CP 比は 6~8、産乳養分は 4~5 です。このことから判断すると放牧草や良質のグラスサイレージは産乳養分の栄養バランスを備えているといえます。

そしてその TDN 価格 (コスト) は安価であり、配合飼料の三分の一程度になっています。自給飼料の経済的優位性が明かです。この安価でかつ産乳養分の栄養分を備えている放牧草の利用が放牧経営の飼料費節減に大きく寄与します。この結果、生産費用が低く抑えられ所得の拡大に波及しているのです。

表 購入飼料価格と自給飼料価格(北海道)

種 類	TDN含有率 % (乾物)	CP含有率 % (乾物)	TDN/CP 比	TDN価格 円/kg
配合16	72.0~76.0	16.0	4.5~4.8	85~90
配合18	72.0~76.0	18.0	4.0~4.2	90~95
コーン	79.6	8.7	9.1	70.1
ビートパルプ	71.0	13.1	5.4	68.6
自給飼料(放牧)	12.2(67.8)	3.6(20)	3.4	20~25
自給飼料(低水分サイレージ)	27.2(60.9)	5.5(12.2)	4.9	30~40

注) 自給飼料TDN価格は放牧経営の実績、購入飼料価格は実勢価格

3. どうやったら放牧できるの？

(1) 放牧を始める要件

1) 放牧の情報収集と検討

牧場に適した牧草、放牧方法、経営収支など、放牧を始める前に十分に情報収集します。放牧酪農家のもとで技術を習得しましょう。

2) 土地の入手

飲み水やひ陰場所がある放牧草地を搾乳牛舎の周りに確保できる土地を手に入れます。

3) 放牧に適した牛群

乳量より乳成分を重視して、肢蹄が丈夫な牛を導入します。泌乳ピークが高い乳牛は放牧では飼いにくいです。

4) 周辺住民の理解と連携

良好な関係を築きましょう。

新規就農者にとって、土地だけでなく牛、牛舎、搾乳施設など多額な資金を準備しなければならないことは大きな負担です。離農酪農家からの牧場の取得や、第三者継承により牧場を引き継ぐ事例が多いです。放牧酪農には様々なタイプがあり、技術習得も必要です。放牧酪農実践農家、普及指導機関などから情報収集を行い、自分の目指したい放牧酪農像を描きましょう。できれば複数の放牧酪農家のもとで技術を習得するのが望ましいです。放牧酪農を実践するには、放牧地と搾乳牛舎の間を牛がスムーズに移動できることが必要です。

また、放牧時に利用できる飲み水や暑さや雨風をしのげる場所の確保も必要です。牧場の選定にあたっては、立地条件、草地や施設の配置、草地面積、周辺住民の理解など吟味します。放牧未経験の牛は、無駄に歩き回り、上手に草を食べられません。育成牛を導入して徐々に放牧に慣らすのが理想的ですが、成牛を導入する場合は放牧経験牛を選ぶか、未経験牛の場合は放牧馴致を十分に行います。

放牧畜産牧場の動画紹介（（一社）日本草地畜産種子協会）

<http://souchi.lin.gr.jp/houboku/grassfarming/>

酪農家になりたい（中央酪農会議）

<https://dairyfarmer.jp>

就農する土地を探したい～農地中間管理機構（農林水産省）

<https://www.maff.go.jp/j/keiei/koukai/kikou/nouchibank.html>

酪農を学びたい（全酪アカデミー）

<https://z-academy.org/>

(2) 放牧酪農への道

1) 土地利用計画の作成

放牧地、採草地、兼用地を割り振る。通路、飲水、ひ陰場所は、牛や作業の動線、水はけ、設置しやすさを考慮します。

2) 牧柵設置

牧場の境界線には牛の脱走や野生動物侵入防止の丈夫な外柵を、放牧地内は移動が容易な簡易な電気牧柵を利用します。

3) 通路・水飲み場設置

設置場所は降水の流路や土壌崩壊を考慮します。外部へつながる川や池から直接、牛に水を飲ませないようにします。

4) 放牧に慣らす・慣れる

牛も人も小面積で短時間から徐々に放牧に慣れましょう。あせらず数年かけて、安定した放牧酪農を目指します。

5) 放牧地の植生改善

短草利用、高栄養草種の導入、雑草防除を心がけます。

費用のかかる放牧地の整備は計画的に行います。変更しやすいように移動式の施設や機材の利用を考えます。野生動物の侵入は草地生産性を下げ、家畜防疫上も問題です。通路、水飲み場、出入口は泥濘化しやすく、急傾斜面に設置した牧柵や通路から土壌崩壊が起きることがあります。泌乳量が 9000kg を超える牛は放牧では飼いにくいです。草をよく食べ、足腰が強く、乳質・乳量・繁殖成績が安定した牛を残します。草地の植生を改善して、草地からの栄養摂取量を高めます。

集約放牧導入マニュアル（農研機構）

https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/files/syuyaku.pdf

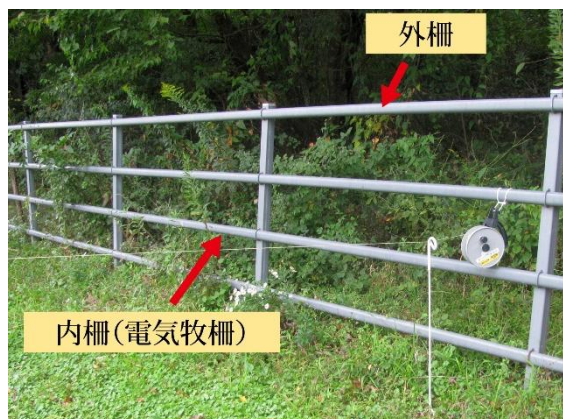
府県型搾乳牛放牧の手引き（（一社）日本草地畜産種子協会）

<https://souchi.lin.gr.jp/pdf/news20140418.pdf>

i) 牧柵

外柵は脱柵、野生動物の侵入を防ぐために十分な強度が必要です。張力を緩めて倒伏させることができるタイプの高張力線は、降雪時や作業機を入れるときに便利です。簡易な電気柵は物理的な強度はなく、電気ショックを嫌う心理柵です。事前に牛に電気柵に慣れさせてから放牧します。また、通電していないことがわかると、簡単に脱柵するので、漏電がないように日頃から確認します。スプリングゲートは長さの異なる出入り口に利用できて便利です。牧区の出入口の場所は牛の移動の労力に大きく影響します。動線をよく考えましょう。

鋼鉄製の外柵とポリワイヤーの電気牧柵の内柵



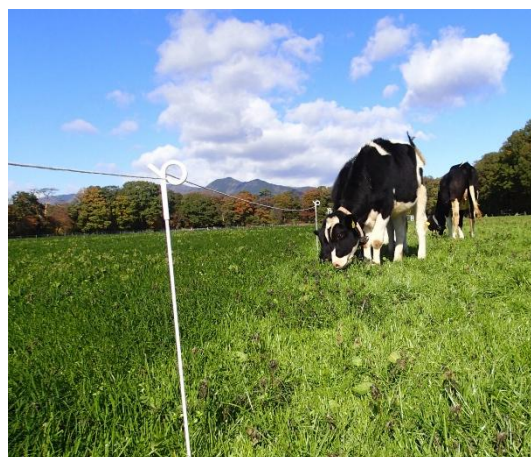
木製の外柵



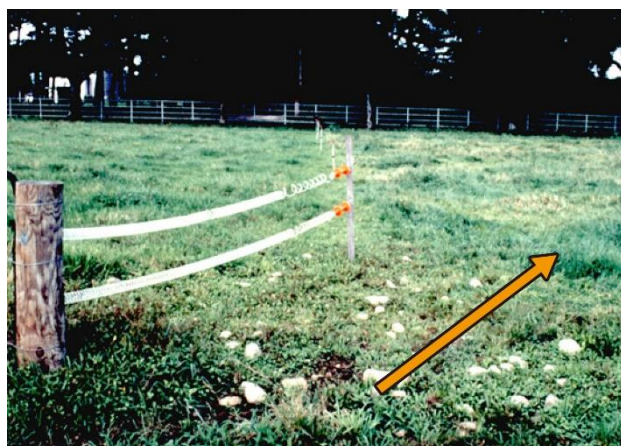
高張力鋼線の電気牧柵の外柵



簡易な電気柵で牧区を区切る



スプリングゲートの出入り口。開いている右側の牧区を利用



高張力線設置マニュアル（家畜改良センター）

https://www.nlbc.go.jp/miyazaki/denkibokusakusechiriyou/denboku1_4-miyazaki.html

ii) 通路・飲水器

泥濘化しやすい通路は、小石の上に十分な厚さの火山灰や山砂を敷き、降雨時に水みちにならないように、草地よりやや高くなるようにします。蹄より大きな間隔のキャトルゲート（テキサスゲート）は車両は通れますが、牛は通過できません。飲水量の不足は採食量や乳量の低下につながります。どの放牧地にいても清潔な水が飲めるように飲水器を配置します。牧場内の川を利用する場合は、下流の汚染を招かないように牛が立ち入らないようにし、配水管で飲水器に供給します。また、止水弁を飲水器につけて周囲の泥濘化を防止しましょう。

火山灰が敷かれた通路



ウォーターカップで作られた移動式水槽



キャトルゲート



ボールタップ付飲水器台車、タンク、



iii) ひ陰林・給餌・アブトラップ

乳牛は暑熱に弱いため、放牧地にひ陰場所を設けます。ひ陰林は立木間隔が1.5～2.5m前後、面積4.5～5.0 m²/頭が標準とされています。ひ陰林は、吸血昆虫や風雨からの回避場所としても使われます。アブによる吸血は病気を媒介するだけでなく、大きなストレスとなり採食量の低下を招きます。アブの被害が大きいときは、アブトラップを設置します。簡易な自作タイプもあります。放牧地やパドックで鉋塩や貯蔵牧草を長期間給与する場合は、雨でぬれないよう工夫します。補助飼料を給与する施設の周りは泥濘化対策をするか簡単に移動できるタイプを検討します。

ひ陰林



アブトラップ



コルゲート管を半分に切った濃厚飼料給与槽



屋根付草架



折りたたみ式アブ防除用トラップ（農研機構）

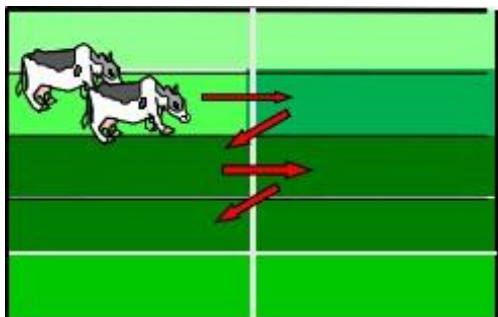
<https://www.naro.go.jp/laboratory/tarc/contents/horseflytrap/index.html>

（３）放牧草地の利用

放牧酪農では、高栄養の草を効率的に牛に食べさせることが重要です。まず、代表的な放牧方法について、次に高栄養草地について解説します。連続放牧は、転牧の手間や牧柵資材が少なくすむのですが、草の生産量や被食量の把握が難しいので、初心者は輪換放牧から始めるのがいいでしょう。暑熱の影響や放牧地面積に制限があるときは、夜間放牧や時間制限放牧に切り替えます。消化率の高い草は採食量も高く、栄養摂取量も高まります。短い草丈で利用すると消化率、粗タンパク質含量が高くなります。集約的な放牧利用に向けた高栄養牧草はペレニアルライグラスです。寒地型牧草利用が難しい暖地では、冬作物のイタリアンライグラスで冬から初夏まで放牧を行なっている事例もあります。

１）代表的な放牧方法

・ 輪換放牧



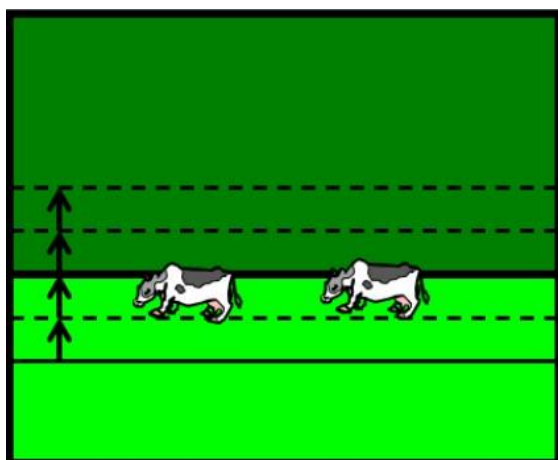
放牧地を区切って順番に回す。

小牧区：1日1～2牧区利用(集約放牧)

中牧区：1牧区3～5日利用

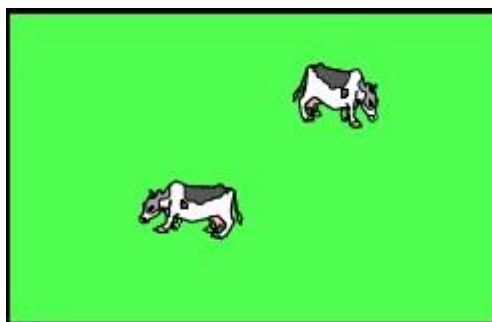
大牧区：1牧区1週間以上利用

・ ストリップ放牧(带状放牧)



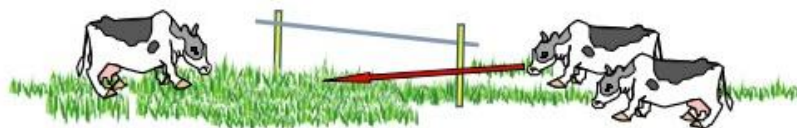
带状に放牧地を細く区切り、少しずつ牧柵を前進。草の踏み倒しや食べ残しを少なくするために適用する。後ろにも牧柵を張る場合もある。

・ 連続放牧



1つの放牧地で放牧し続ける。

・ 先行後追い放牧



搾乳牛を先に放牧し、食べ残した草を乾乳牛など栄養要求量の低い牛に食べさせる。

放牧酪農(マニュアル) ▶ 放牧の方法 ((一社) 日本草地畜産種子協会)

http://souchi.lin.gr.jp/skill/4_3.php

当資料に記載された放牧方式の区分

<https://gafsa.wa-gokoro.info/lp/lp%ef%bc%97/>

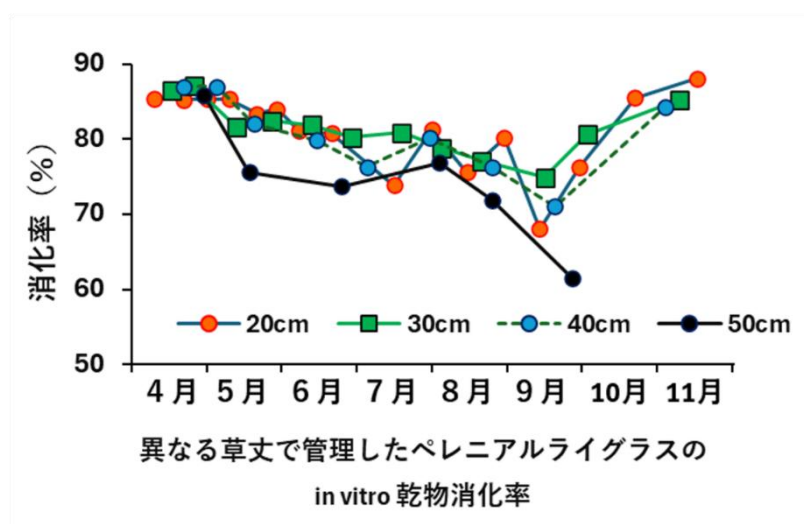
2) 高栄養草地

放牧地を高栄養草地にするには、短草利用を心がけます。若い状態の草は、消化率、粗タンパク質含量が高く、牛もよく食べます。季節を通じて、短草利用するには、季節によって変化する生産量と牛の採食量の調整が必要です。牧草は春の生産量が盛大なので草が余っ

て伸びすぎることが多く、夏には不足しがちです。そこで、一部の草地は兼用利用し、春に調製したサイレージなどは牧草量が不足する夏や冬季用の飼料にします。

また、採食量のピークと牧草生産量のピークが重なるように季節繁殖を行う方法もあります。多くの雑草は採食されますが、棘や有毒物質がある植物は、採食されずに種や地下茎で蔓延するものがあります。これらの雑草は初期防除が重要です。放牧酪農に適した草種は再生力と栄養価が高い、ペレニアルライグラス、メドウフェスク、オーチャードグラスです。地域にあった草種を簡易更新などで計画的に転換します。シロクローバは、イネ科植物に比べて粗タンパク質やミネラル含量が多く、窒素施肥節減もできるので混播するのがいいでしょう。

放牧地はふん尿が還元されるので、採草地に比べて施肥量は少なくてすみます。併給飼料が多いと、採食による持出し量に比べてふん尿からの還元量が多くなります。スプリングフラッシュを抑えたい場合は、春の施肥量を少なくします。牧草生産量が低かったり、雑草が繁茂したりする場合は、土壌診断を受けて、施肥設計を見なおしましょう。



春の放牧草の消化率は85%もある。夏には消化率が落ちるが、短い状態で利用するとサイレージや乾草に比べて高い状態が維持できる。

草地で見られる強害雑草

ヨウシュヤマゴボウ



チカラシバ



ワルナスビ



アザミ類



イバラ類



ギシギシ



土地の条件に適した草種と利用法の考え方

土地条件	急傾斜地	緩傾斜地	平坦地	野草地・林地
草種	シバ、ケンタッキーブルーグラス、センテッドグラス、バヒアグラス	トルフェスク、オーチャードグラス、シロクローバ、ペレニアルライグラス	メドウフェスク、チモシー、イタリアンライグラス	ササ、スギ
放牧方法	連続放牧	輪換放牧・採草兼用		夏季以降放牧
施肥水準 ¹⁾	無～低	低～中	中～高	無～低
牧草の栄養価	低	中～高	高	低～中
対象牛	繁殖牛	育成牛、哺乳中の母子	育成牛、搾乳牛	繁殖牛
牧養力(CD/ha) ²⁾	100～300	300～400	500～700	100以下
個体乳量(kg)	3500～5500	6000～7000	7000～9000	

1) 施肥水準の目安10a当たりの年間窒素施用量として、高；10kg、中；5kg、低；2～3kg

2) CD（カウデー）：1CDは体重500kgの牛が維持状態で1日飼養可能な草地の生産量

（４）放牧家畜の管理

牛舎では餌の給与量と牛が残した量から、どれくらい牛が食べたかが把握できますが、放牧では牛や放牧地の状態から推定します。また、放牧地、牛舎への往復時、搾乳時に牛をよく観察し、病気や発情を見逃さないようにします。以下にチェックポイントをまとめました。放牧転換時には人も牛も慣れるのに時間がかかります。得られる情報を放牧管理にフィードバックして、自分の経営にあった放牧酪農を目指しましょう。

チェックポイント

1) 放牧地

草量・植生・草質、行動観察（採食、休息、反芻、発情、歩行）

2) 牛舎

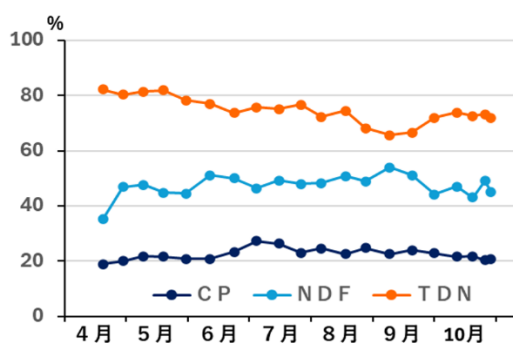
併給飼料の採食量、食いつき、発情、歩行

3) 牛の状態

健康状態、ケガ、ボディコンディション、乳量、乳質

4) 放牧計画、併給飼料設計

上記の結果を反映する



ベレニアルライグラス優占草地を短草利用したときの栄養価の季節変化

・放牧草はサイレージ、乾草に比べて、TDN、CP 含量が高いです。季節変化が大きいです。併給飼料の量と質を調整し、CP の過剰摂取に注意します。

・水分が多いので、ふんが非常に柔らかくなりますが、元気であれば、心配はありません。

・乳量・乳質から、エネルギー、繊維成分、CP 等の過不足を判断します。

草丈、牛の様子を観察

腹が張っているか？



放牧に慣れないうちは、なかなか生草を食べたがらない牛がいます。また牛舎での飼料給

与量が多いと、放牧地での採食量は低下します。放牧に慣れた牛は、新しい牧区に入った直後に1～2時間熱心に採食し、満足すると横臥して反芻します。放牧地で牛が休息せず、ずっと採食している、牧柵外に首を出して無理に外の草を食べようとする、脱柵するなどの行動があれば、草量不足のサインです。草が伸びているのに、牛が新しい牧区に入りたがらないときは、草質の低下、暑さの影響をうたがいます。放牧後に草地の草丈が短くなり、次の牧区と明瞭な色の差があり、牛の腹が張っていれば、放牧地で十分に採食している証拠です。

衛生管理は舎飼いと同様に「飼養衛生管理基準」を遵守しましょう。牛のケガ、事故、病気の対策の基本は予防です。放牧開始時期の春は天気が急変することも多く、飼養環境の急変によるストレスもあり、体調を崩しやすいです。徐々に放牧に慣らしましょう。舎飼いに移行するときも飼料の急変は避けます。吸血昆虫が媒介する病気や草の成分に起因する病気など、放牧で注意しなければいけない病気もあります。

吸血昆虫対策には、アブトラップの設置、殺ダニ剤や駆虫薬の投与があります。有害植物など危険が拡大しないうちにリスク要因は早めに除去しましょう。日頃から牛の健康状態を把握して、病気の早期発見・早期治療に努めます。

放牧馴致は重要！～何に慣れさせる？～

- 1) 屋外環境：パドックや牛舎に近接した小面積草地で慣らす。
- 2) 生草：生草給与または牛舎に近接した小面積で練習。
- 3) 群飼：群れの順位付けが決定するまで脱柵に注意。公共牧場を利用するときは数頭で預けるのが望ましい。
- 4) 電気牧柵：牛舎やパドックで自然に接触させて覚えさせる。

放牧馴致をした牛は病気にかかりにくく、放牧初期の発育の停滞期間が短く、低下量も小さいです。病気になった牛は春の品質の良い草を十分に食べることができず、回復までに時間がかかります。また、育成時に放牧を経験すると、成牛になったときに放牧草を上手に食べることができます。牧区が狭いときは順位の低い牛は採食が十分できないことがあるので、注意しましょう。

放牧酪農（マニュアル）▶放牧草からの栄養摂取量と補助飼料の給与法（（一社）日本草地畜産種子協会）

http://souchi.lin.gr.jp/skill/4_5.php

飼養衛生管理基準（農林水産省）

https://www.maff.go.jp/j/syouan/douei/katiku_yobo/k_shiyou/

牧場管理効率化マニュアルー放牧馴致とマダニ対策編ー（農研機構）

https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/files/nilgs-bokujokanri2.pdf

牛を放牧するときの馴致について（（一社）日本草地畜産種子協会）

http://souchi.lin.gr.jp/event/pdf/summit06_2.pdf

4. どこに相談したらいいの

（１）放牧をやってみたいと思ったときの相談先

1) 農業を始める.JP（全国新規就農相談センター）

職業として農業に興味を持った方、これから農業を始めたい方が、就農に向けて具体的なアクションを起こしていくために必要となる情報を一元的に閲覧できるポータルサイトで、次の６つに分類した情報を提供しています。

「就農を知る」：農業を仕事にするって、どういうことなのか？を理解するための情報です。

「体験する」：畜産は養牛（肉牛飼養）を主に紹介しています。

「相談する」：全国新規就農相談センター、各都道府県の新規就農相談窓口がわかります。

「研修/学ぶ」：農業未経験の方が、農業に関する知識や技術を学ぶ方法がわかります。

「求人情報」：求人情報に触れることができます。

「支援情報」：国や都道府県、市町村の新規就農のための支援情報がわかります。

全体として放牧就農に関する情報は少ないので、放牧に関する情報を得た市町村の就農相談窓口に直接相談するのが良いです。

農業を始める.JP（全国新規就農相談センター）

<https://www.be-farmer.jp/>

2) 就農相談会（新・農業人フェア）への参加

新・農業人フェアは東京、大阪で年に数回開催されます。このフェアには全国の自治体が参加するので、自治体や農業法人と直接話をし、放牧就農の可能性や支援制度や研修制度、農業の働き方、地方への移住などについて情報を得ることが出来ます。

新・農業人フェア（全国新規就農相談センター）

「新・農業人フェア」で検索

3) JA グループの新規就農支援

全国の JA から就農情報、各 JA の情報が検索できます。農業を始めたい方向けに、新規

就農支援情報を各 JA 単位でご紹介しています。

新規就農支援 (JA グループ)

<https://agri.ja-group.jp/support/start>

4) 都道府県の相談窓口例 (北海道)

○相談窓口

新規就農相談窓口として北海道農業担い手育成センターがあります。同センターは道内各市町村の新規就農相談窓口とつながっており、各市町村の新規就農受入状況、新規就農支援策などの情報を知ることができます。また、実際に体験したい、研修をしたい、就農をしたいなどの要望については、当窓口の就農コーディネーターがメールや面接で対応しております。

北海道で農業を始めるサイト(公益財団法人北海道農業公社 北海道農業担い手育成センター)

<https://www.adhokkaido.or.jp/ninaite>

○研修牧場の紹介

放牧酪農で新規就農を目指す希望者に対して、市町村が放牧実践農家を研修牧場に指定あるいは研修牧場を設置して受け入れ体制を整えております。

代表的な研修牧場は以下の通りです。

浜中町就農者研修牧場 (JA 浜中町)

<https://www.ja-hamanaka.or.jp/newfarmer/begin/training.php>

新規就農者宿泊研修施設「しべちゃ農楽校」(標茶町担い手育成協議会)

https://shibecha-ninaite.com/training_facilities.html